地域情報（県別）

【沖縄】県内初の回診型小児科、キャッシュレスなど工夫随所に-宮城大雅・ゆくいこども診療所所長に聞く◆Vol.2

待合室と診察室を兼ねた部屋が5つ、そこに医師が訪れる診療スタイル

2025年6月25日 (水)配信 m3.com地域版

2025年4月に開院した、沖縄県では初となる医師回診型の小児科クリニック「ゆくいこども診療所」（南城市）。宮城大雅所長は重症心身障害児や自閉症などの子でも受診しやすいよう、環境とシステムの随所に工夫を施した。待合室と診察室が一体となった「ゆくい室」、院内会計不要のキャッシュレス決済、感染リスクを減らすための動線分離――。開院してまだ1カ月半だが、その利便性の高さに患者家族から喜びの声が聞かれているという。（2025年5月15日オンラインインタビュー、計3回連載の2回目）

▼第1回はこちら
▼第3回はこちら（近日公開）

宮城大雅氏（本人提供）

宮古島で障害福祉事業を展開するNPOひだまりが母体

――宮城先生は北海道の「生涯医療クリニックさっぽろ」で小児在宅を学んだ後、沖縄に戻ります。

沖縄に戻った後は医療法人真成会が運営する「ゆずりは訪問診療所」（那覇市）に在籍し、子どもだけでなく成人も対象に在宅医療を行いました。この時から医療型障害児入所施設である「沖縄南部療育医療センター」（同市）で週に1回働き、1年半後にこちらの常勤となって療育を専門的に学びました。

――そして、2025年4月に「ゆくいこども診療所」の所長に就任します。資料によると、NPO法人「ひだまり」（宮古島市）が運営を担っているそうですね。

ひだまりは、小児科クリニック、子ども食堂、DVシェルターの運営や10代の妊産婦のサポートなどを行っているNPOです。私は沖縄県立宮古病院に勤務していた頃、こちらの勝連（かつれん）聖史代表理事と知り合い、てぃんさぐの会のサマーキャンプを宮古島で一緒に開催したことをきっかけに関係を深めていきました。私はひだまりが運営する小児科クリニック「ひだまり診療所」のお手伝いもしており、「いつか一緒に働きたいね」と話していたんです。

ゆくいこども診療所の開設は、私からクリニックのコンセプトを含めて勝連さんにご相談しました。私は以前から地域における一般小児と重症心身障害児（以下、重心）の子たちのかかりつけ医になりたい思いがあり、2025年に41歳になる年齢と体力を踏まえ、「今、チャレンジしたいな」と。病院では急性期医療が終わると患者さんは地域に帰りますが、特に重心の子にはその受け皿が乏しく、途方に暮れるお母さんを見てきました。またコロナ禍では、医療機関のキャパシティーの関係から発熱した重心の子の受け入れ先が見つからず、東京の先生にオンライン診療を行ってもらったものの、これを機にご家族が医療不信になってしまったケースもあります。「子どもと親御さんにとって身近な地域で診ていきたい。小児科医としてより柔軟に対応したい」思いがあったのです。

勝連さんも私の考えに共感を示してくださり、ひだまりが経営母体となってクリニックを開設することになりました。

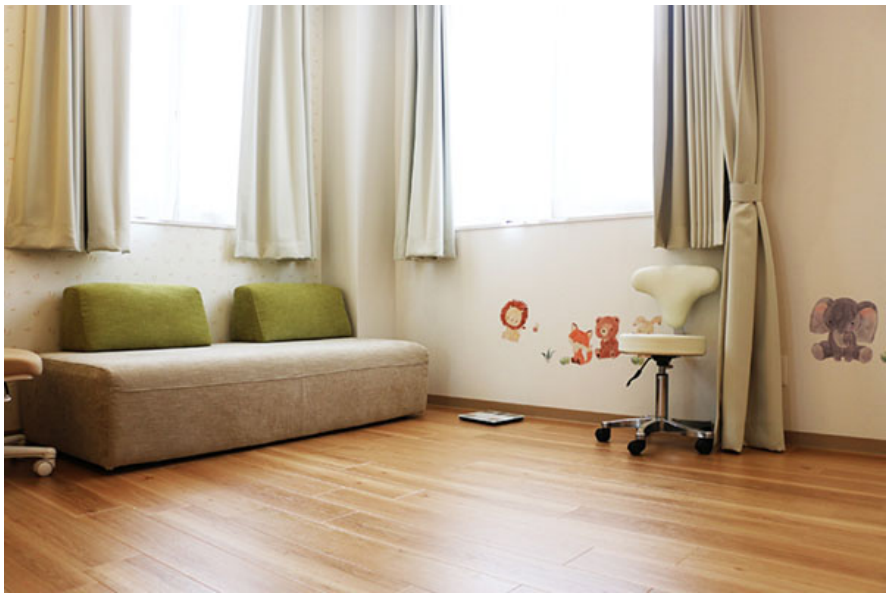
東京都渋谷区のクリニックを参考に

――ゆくいこども診療所は、患者と家族が待つ部屋に医師が入室して診察する「回診型」であり、これは沖縄県の小児科クリニックでは初めてだといいます。アイデアはどのように生まれたのですか。

勤務医時代の経験から、どんな子でも受診しやすいクリニックにしたい思いがありました。回診型のアイデアは、私が小児在宅をしてきたことが背景にあります。待合室と診察室を一緒にして処置もその中でできるようにすれば、「子どもはまるで家にいるようにくつろげるのではないか」と考えていました。

回診型を採用しているクリニックの事例も参考にしました。YouTubeで紹介されている施設を見たほか、実際に現場も見学しました。それは、東京都渋谷区で内科、皮膚科、泌尿器科、婦人科などを標ぼうしている「クリニックTEN」です。勝連さんが同院を知っており、「面白いクリニックがあるから見に行きましょう」と誘ってくれたんですね。私たちは院内を歩きながら、「これはすごい……。リラックスできていいよね」と感想を言い合い、アイデアが広がっていきました。

当院では5つの部屋を備えており、いずれも待合室と診察室を兼ねています。部屋の真ん中をカーテンで区切ると一方を診察用にでき、またカーテンを開放すると患者さん家族など最大6人ほどが入室可能です。ソファを置いたり、畳を敷いたりと部屋ごとに特徴を分けています。



待合室と診察室が一体となった「ゆくい室」（ホームページから引用）

環境・システムの工夫で待ち時間減と診察時間確保に成功

――同院ではキャッシュレス決済にも特徴があります。端末を置くクリニックは増えていますが、クレジットカード情報を事前に登録し、院内で会計しない形は珍しいと思いました。

当院の会計方法は、コミュニケーションアプリ「LINE」に登録していただいたクレジットカードからの引き落としか銀行振り込みにしており、院内で現金をやり取りすることはありません。こうすることで、患者さんとご家族は自宅とゆくい室（診察室）をスムーズに往復できます。明細書も診察後にLINEで送られ、引き落としは基本的に月末にまとめて行われます。この会計システムもクリニックTENが行っていたものを参考にさせていただきました。

ほかの工夫点としては、車社会である地域性と当院の利用者層を考慮して20台ほど止められる大型駐車場を完備し、また、クリニックの入り口は一般用と感染者用の2つを設け、新生児や重心の子も不安なく来院できる仕様にしました。

――同院ではLINEでの完全予約制を採用し、先ほどご説明いただいた環境・システムを生かして、待ち時間の減少と診察時間の確保に努めているといいます。現状をお聞かせください。

当院では診療を患者さんによってコーディネートしています。事前の問診システムを活用して、「早く薬をもらいたい」人はスピーディーに、「じっくり診療してほしい」人には納得できるまでお話ししています。重心の子が来るときは前後に時間の余白を設け、感染分離も図ります。そのため、診察時間は患者さん個々で異なりますが、平均すると一般診療では5～10分ほど、重心の子では15～20分ほど確保できています。完全予約制なので、待ち時間は5～10分ほど。院内で会計しなくて済むため、処方箋がない場合は診察を終えて5分後には帰れます。「すごく早いね」と親御さんからは感想が聞かれており、うれしいですね。

◆宮城 大雅（みやぎ・ともつね）氏

2011年琉球大学医学部卒。沖縄県立南部医療センター・こども医療センターでの初期・後期研修修了後、離島研修として沖縄県立宮古病院小児科に在籍。「生涯医療クリニックさっぽろ」と「ゆずりは訪問診療所」で小児等在宅医療を行い、医療型障害児入所施設「沖縄南部療育医療センター」で療育を学ぶ。2025年4月から「ゆくいこども診療所」所長。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索